悠・遊・友、そして意宇
「志」
リンク・メディア

ゆう科学通信

Vol.33
Mar. 3月 発行：八雲志人館
2016年3月28日発行

〒690-2102
島根県松江市八雲町東岩坂3442-9
電話・FAX 0852-54-1023
E-mail／shijinkan@bell.ocn.ne.jp

村志一一

「夢の芽生える文化」
創造のプラットホーム。
「八雲志人館」は、
「価値創造地域」の
母体をめざして活動します。

世界の縁結びの地「出雲」で才能を開花させる

松江市をホームタウンとして、2011年からスタートしたサッカーチーム「松江シティFC（フットボールクラブ）」。2016年にJFL（日本フットボールリーグ＝社会人リーグ）昇格、2020年までにJリーグ（日本プロサッカーリーグ）参入を目標に掲げて活動しています。

新年度目前の3月13日、チームは、小松昭夫 人間自然科学研究所理事長（小松電機産業株式会社代表取締役）を本拠の松江市営陸上競技場に招き、田中孝司監督と選手・役員31人が集まり、小松理事長のスピーチを聴きました。

小松昭夫 講演

小松昭夫理事長

スピーチを紹介する前に、小松理事長の経歴の一端に触れておきます。

昭和40年代、山陰では数少ない東証1部上場企業で、日本3大農機メーカーのひとつであった佐藤造機（本社・八束郡東出雲町＝現・松江市）の研究所に勤務。世界の機械開発の中でも、農機は、稲作中心の日本で独自の発達を遂げた分野です。他の業種のように欧米の設計図面を改良するのではなく、「本質」を考察し、法則を知り、設計に生かす――小松氏はその過程を通じて、目的に向かって、順序を踏んで論理的に組み立てる、「科学」する姿勢を身につけていきます。

当時、戦後史に残ると言われた佐藤造機の倒産を経験し、数年間の大阪での様々なビジネス体験を経て、自宅の納屋を改装して「小松産業」を始めます。1973年2月のことでした。

自分の中の敵と味方と霊魂

月給が3万円の時代に、弟と2人で失業支度金10万円を元手に会社をスタートさせました。今、私は72歳です。孔子は70歳を「心の欲する所に従えども矩（のり）を踰（こ）えず」と言っています。「のりをこえず」とは、「羽目を外さない」ということですね。これは、今で言えば、テロが起きたり、命のやり取りをしている、そういうところには手を触れるな、ということではないかと理解しています。

ところで、ヘレン・ケラーを知らない人がいますか？（会場、数人手が挙がる）。喋れない、見えない、聞こえないの「三重苦」の人ですね。その分、残された感覚が非常に鋭くなります。昔の殿様は、目が見えない人をたくさんそばに置いていました。ある時、「南国から象というものが来た。この象とはどういうものか、伝えてくれ」と命じます。そうすると、手で鼻に触ったお側の人は「象は、竹みたいです」と言う。お腹を触った人は、「象は畳みたいだ」と言う。そうすると、「殿様にいい加減なことを言うな」、「とんでもない」と、お互い喧嘩が始まります。その時、殿様はこう言います。「あなた方の話を全部合わせたものが象だ」。

サッカーは敵、味方、観客、いろんな情報を総合して戦うものですね。同じ敵でも受け取り方は皆違う。

皆さん子どものころ野球はやりましたか？　長嶋（茂雄巨人軍名誉監督）と野村（克也、元ヤクルト、阪神、楽天監督）は知っていますか？

長嶋は演繹法（※一般的・普遍的な前提から、より個別的・特殊的な結論を導き出す 論理的推論の方法）を使うんです。ピッチャーのボールが手から離れて、バッターボックスに入るまでに、スタンスを変えることができる。

野村はどうしたと思いますか？彼はデータを取った。ピッチャーの振りかぶりの深さで、カーブか、フォークか、データを取った。野村は分析なんですよ。だから彼は素晴らしい監督になった。

物事を論理的に組み立てることによって、眠っている才能を開花させることができる。そうでないと、自分の中に敵ができるのです。自分の中に味方ができ、霊魂が覚醒する言語習慣を身につけることが大事です。

松江シティFCの選手たち

眠っている才能が開花する当事者意識

私の出身の八雲村（現松江市八雲町）は5300人の人口でした。私の中学校の同級生は90人、半分は中卒で、夜行列車で関西に集団就職に行った。20人が職業訓練校、20人が高卒、昼の大学に行ったのはひとりでした。

私が卒業した松江工業高校は、陸軍の松江63連隊といって、工兵の連隊の兵舎でした。機械設備が整っていたので、戦後、工業高校にするのにもってこいでした。

日本プロバスケットボールリーグの島根スサノオマジックが誕生した背景には、松江工業高校の渡辺という監督の存在が大きい。それから、かつて練兵場だった建物が体育館になっていて、その天井が低い。だから水平なパスをする必要がある。そのためには、足腰を鍛えないといけない。

かつての練兵場煉瓦塀（松江工業高校）

松江工業からほど近い緑山公園（陸軍慰霊碑のある松江市内の公園）に行くと、石塔が2つあります。ひとつは満州事変の戦勝記念に昭和10年（1935年）に建立された燈籠で、笠の四隅が意気揚々と跳ね上がっています。もうひとつは63連隊に多数の戦没者が出た台児荘の戦いの「慰霊」燈籠で、昭和13年（1938年）に建立されています。これは笠の四隅も肩を落としていて、しょぼんとしているように見えます。

慰霊灯籠

戦勝記念灯籠

松江工業のバスケットボールチームは、その2つの石塔に続く数十段ある階段の昇り降りによって足腰を鍛え、数度の全国制覇を果たした。強くなるには、そういう背景と経緯があるのです。

歴史に学ぶ時、「なるほどそうだったのか」と、この「なるほどなあ」というのが大事なんです。そこから眠っている才能が出てくる。

緑山公園の石段

私は10万円のお金から、今、こうなった。ちゃんと手順があるんです。いくらでも教えます。

サッカーを、同じやるなら、才能が開花する手順でやったほうがいい。人間がやることは本質的に皆同じです。ただし手順が違う。自分のこととして、当事者意識が芽生えることで、眠っている才能が開花するのです。

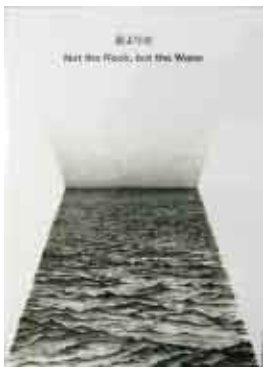
要は自分の頭ではなく、相手の頭を使う。このことを分別と言います。敵の頭、敵の技を使う。チームプレーとは、相手チームも含めてのチームプレーなのです。また、観客をうまく使い、味方の選手、敵に影響を及ぼすのです。

相手をよく知る

これがわかる人（冊子『岩より水』の裏表紙を掲げて）。（会場から…指がない）。そうです。「断指同盟」といいます。だれか知ってますか？（会場から…安重根ですね。※アン・ジュングン＝1909年、ハルビン駅で前韓国統監の伊藤博文を殺害。韓国では義士）では、日本の三浦公使が先頭になって、48人が夜中に韓国の王宮に押し入って、寝ている女王を殺して焼いた（※明成皇后暗殺事件、1895年）。このことを知っている人。（会場、手が挙がらず）。韓国では幼稚園から知っています。相手は子どもさえ知っているのに、日本では知らない。これが韓国と揉めるもとなんです。

サッカーでも必ず相手をよく知らないといけない。「キーマンは誰か」を知る。しかも過去のデータと試合前の観客の情報、現在の敵、味方の選手のデータを総合して作戦を立てないといけない。チームプレーはは野村方式に変えないといけない。相手がそうする場合は、「なぜそういうことをするのか」と論理的に考える。

この表紙（『岩より水』）を見てください。宍道湖、中海、大橋川のさざなみを表しています。一番が湖、二番が川、三番が海。そういう所に行って、ボーっとすることが大事です。そうすると脳の中がつながってきて、ファインプレーができる。


『岩より水』表紙

この冊子の最後の写真を見てください。100年前にカーネギーが寄付した、オランダ・ハーグの「平和宮」の中です。ここには国際司法裁判所が入っており、そこで平和関係の学会が開かれた際に、「調停の間」で私の写真を囲んで撮影されたものです。

裏表紙
（安重根義士の手形）

ここを、かつて京都西陣織の社長が訪問しました。女性が着物を着なくなって需要が少なくなった時代のことです。ところが、ヨーロッパでは、壁にじゅうたんが掛けられている。これを見て、「そうだ。これを西陣織で作ったら！」というので、「調停の間」に寄贈した。それであっという間に新しい産業ができたのです。今では緞帳（大舞台の幕）の会社でもあります。

サッカーでやることと、人間がやること、皆同じです。

ここ出雲は「世界の縁結びの地」です。ぜひ世界のチャンピオンを目指してがんばってください。

（堀江研次）

〈編集：交易場修　デザイン：寺戸良信〉